

ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）第18回国際会議 参加報告書
（2026年08月27日～08月30日 ポズナン・ポーランド）

～ 新たな問いとともに、ポズナンへ ～

シルウィーディー サラ
東京外国語大学特別研究員・非常勤講師
2025年度奨学生

蝉たちがその一生を終え、空蝉を残していく夏の終わり、私は新たな研究テーマを携えて、ポーランドへと旅立った。行き先は、ポーランド西中部に位置する都市、ポズナンである。

ポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学では、ヨーロッパ日本研究協会（European Association for Japanese Studies : EAJS）の第18回国際会議が3日間にわたって開催された。3年に一度開催されるこの国際会議には、歴史学、社会学、文学といった人文・社会科学から、医学、工学などの自然科学まで、幅広い分野から約1,200人の研究者が集まり、それぞれの視点から日本をめぐる研究を発表した。「ヨーロッパ」の名を冠する学会ではあるものの、参加者はヨーロッパに限られない。今回も世界各地から研究者が集まり、非常に国際色豊かな場となった。

初日の開会式では、研究者たちによる音楽演奏も披露された。興味深いことに、演奏された曲のなかには、歴史学者であり作曲家でもある、私の博士課程の副指導教員フィリップ・シートン先生が作曲した作品も含まれていた。博士論文を書いていた頃、執筆しながら先生の音楽をよく聴いていたこともあり、ポズナンでその曲を耳にして、思いがけず懐かしい気持ちになった。普段は研究者として活動する人々が舞台に立ち、音楽を奏でる姿も印象的で、学問と芸術が交わるかたちで国際会議の幕が開いた。



（写真1：EAJSの開会式）

EAJSの国際会議に参加するのは、今回が初めてだった。ヨーロッパにおける日本研究が現在どのような視点や方法から行われているのか、なかでも日本文学がどのように研究されているのかを実際に知ることを楽しみにしていた。そして何より、博士課程を終えてから新たに取り組み始めた研究プロジェクトの一部を、初めて国際学会で発表できることにワクワクしていた。

これまで私は、太宰治の文学を中心に、書かれた言葉の背後にあるものをいかに読み取り、翻訳できるのかを研究してきた。博士論文では、まるで舞台上のパフォーマンスのように展開する語りに注目し、言葉そのものだけではなく、語り手の声や視点、その変化によって生まれる「パフォーマンス」を、別の言語へどのように移し替えることができるのかを考察した。博士課程を終え、新たな研究へと踏み出した今も、その根底にある問いはつながっている。それは、「目には見えないものを、どのように読み取り、そして翻訳するのか」という問いである。新たな研究では、その

対象を文学に描かれる「見えない障害」、とりわけニューロダイバージェンスへと広げ、日本文学のなかでそれがどのように表現され、さらに翻訳を通して異なる言語や文化へどのように伝わるのかを探っている。

会議3日目の8月29日には、こうした新たな研究の一環として、現代日本文学におけるニューロダイバージェンスをテーマに、「Performative Normality and the Liminalization of Invisible Disability in Murata Sayaka's *Konbini Ningen* (村田沙耶香『コンビニ人間』における「正常性」のパフォーマンスと「見えない障害」のリミナル化)」と題した発表を行った。村田沙耶香の『コンビニ人間』を取り上げ、周囲から「普通」であることを求められる主人公が、他者の言動を観察し、模倣することで社会に適応していく姿を、「正常性」のパフォーマンスという視点から読み解いた。周囲からその「違い」は見えているにもかかわらず、それが障害として認識されないとき、その人は社会のなかでどのような位置に置かれるのか。「普通」を演じることを、単なる社会への同化ではなく、理解や支援を得られないなかで社会を生きるための方法として捉え、「見えない障害」と社会との関係について考察した。



(写真2：口頭発表の様子)

今回、私の発表が村田沙耶香を扱うパネルに組まれていたことも興味深かった。ほかの発表では村田の異なる小説が取り上げられており、それらを聞くことで、自分が扱った『コンビニ人間』

も、村田文学というより大きな文脈のなかから捉え直すことができた。博士論文では太宰治を中心に研究してきたため、博士課程修了後は特定の作家に研究を限定するのではなく、より幅広く作品を扱いたいと考えていた。一方で今回のパネルを通して、個々の作品を研究する際には、その作家の創作全体とのつながりを視野に入れることで見えてくるものもあると、改めて感じた。

発表後の質疑応答でも、参加者からさまざまな質問やコメントをいただいた。研究を始めたばかりだからこそ、自分ではまだ十分に考えられていなかった点に気づかされることもあり、今後さらに研究を深めていくためのヒントを得ることができた

自分の発表以外にも、会議中はできる限り多くのパネルを聴講した。振り返ると、その多くは文学以外のテーマを扱うものだった。メンタルヘルスや日本社会における災害への対応から、ポップカルチャー、アニメツウリズム、日本における移民まで、文学に限られた学会ではなかなか出会うことのない幅広いテーマに触れることができた。なかでもメンタルヘルスをめぐる議論は、「見えない障害」と直接重なるものではないものの、日本社会や制度がこうした問題とどのように向き合っているのかを考えるうえで参考になった。



(写真3：学会で再会した友人たちと)

会場では新たな研究者と知り合い、以前から

知っている研究者たちとも久しぶりに再会することができた。異なる分野や国・地域で研究する人々と直接言葉を交わせたことも、今回の参加で得た大きなものの一つである。



(写真 4：ポズナンの旧市場広場)

ポズナンを発つ日、私はもう一度旧市街へ足を運んだ。数日前とは少し違う気持ちで街を歩きながら、今回出会った研究や人々のことを振り返った。新しい研究テーマとともに初めて訪れたヨーロッパで得た知見や国際的なつながりを、これからの研究につなげていきたい。